



本会が発行する 定期刊行物について

平田 圭二 本会理事／公立はこだて未来大学

英文論文誌 Journal of Information Processing (JIP) が 2012 年 1 月より季刊となることが決まった。現在、本会は JIP を含む 7 種類の定期刊行物を発行しているが、いろいろな名前の出版物があって分かりにくいという声が聞かれる。この機会に本会の定期刊行物について、主に英文論文掲載誌の変遷を追いながら、時代を 3 期に区切って説明する。

第 1 期：1960 年～1993 年

本会創立当初の定期刊行物は、毎月会員の手元に届けられる学会誌「情報処理」だけであった。そこには一般の記事だけでなく、英文や和文の論文もすべて一緒に掲載されていた。1962 年、学会誌に掲載された論文から 10 編ほどを選びその英文要約を掲載するという仕組みで、年刊の英文論文誌 Information Processing in Japan (IPJ) が創刊された。その後本会が順調に発展するとともに、1978 年に IPJ が休刊し新しい英文論文誌 JIP が創刊され（当時は欧文誌と呼ばれた）、英文論文は直接 JIP に投稿されるようになった。翌 1979 年には和文論文のみ掲載する論文誌ジャーナル(和)が学会誌から独立した。

第 2 期：1993 年～2008 年

和文論文数は順調に伸び 1993 年には年間 250 編を超えたが、英文論文は年間 40～50 編にとどまった。結局 JIP は国際的評価が高まらず、国内外の発行部数も伸び悩んだため、1993 年休刊となってしまう。そして英文論文は和文論文とともに論文誌ジャーナル(和英)に混載されることとなる。当時、世界でも十分互していける分野が日本にもあるのに、欧文誌を失ってしまったことは本会会員にとって痛恨の極みであった。いつの日か国際的評価の高い英文論文誌を持つことが本会の悲願となった。

1998 年、後にトランザクションと呼ばれるようになる和英混載の研究会論文誌が創刊される。1990 年代はインターネットを始めとする IT が広く社会に普及し、価値観の多様化が進み多数の研究会が誕生した時期である。トランザクションはそのような研究会が編集する論文誌である。論文誌ジャーナルが学会全体をカバーする 1 つの伝統的な審査基準を持つのに対し、トランザクションは研究会ごとの多様化した価値観に対応して柔軟な審査基準を持つ。2006 年には初の英文論文トランザクションが創刊された。

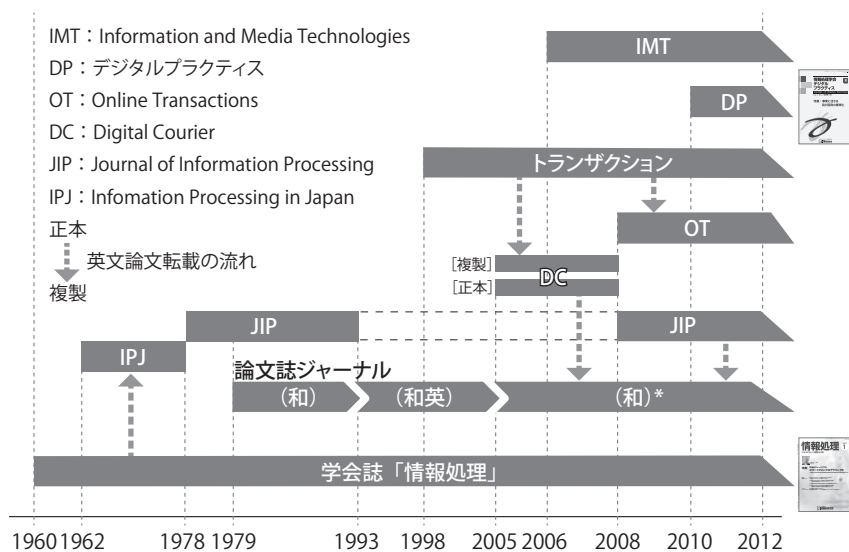
2005 年に英文論文誌 Digital Courier (DC) が創刊される。DC に投稿・採録された英文論文(正本)に加えて、和英混載のトランザクションに掲載された英文論文(正本)のリプリント(複製)が DC に転載された。これで年間 50 編ほどの英文論文を集められるようになった。と同時に、論文誌ジャーナルは和文論文誌(和)に戻った。DC はオンラインのみ、掲載料アリ、英文論文優遇のためオープンアクセスであった。少々ややこしいが、さらに英文論文優遇のため、DC に投稿・採録された英文論文(正本)の複製が論文誌ジャーナル(和)に転載された。

また 2006 年には、情報関係 6 学会^{☆1}が共同で英文論文の複製を転載する Information and Media Technologies (IMT) も創刊された。せっかく英文論文を書いても和英混載の論文誌であるがゆえに埋もれてしまい、世界に向けて成果を発信できないことは、国内の情報関係学会に共通する悩みであった。IMT は J-Stage で無料公開されている。

第 3 期：2008 年～現在

DC の国際的評価を高めるために、学術雑誌の影響度

^{☆1} 本会、映像情報メディア学会、言語処理学会、人工知能学会、日本ソフトウェア科学会、ヒューマンインタフェース学会、その後日本データベース学会が参加し 7 学会となる



* 実際には英文論文も掲載されているが、それは JIP の複製なので (和) と記した。

図-1 本会の定期刊行物の創刊と休刊

を表すデファクト指標の1つである Impact Factor (IF) の取得を目指した。そのためには正本のみの掲載が必須であったので、2008年にDCを休刊し、JIPを復刊させ、1993年以前の体制に戻した。英文論文優遇を継続して、JIP英文論文の複製が論文誌ジャーナル(和)に転載される。復刊したJIPはオンラインのみ、英文論文優遇のため現在はオープンアクセス、2012年7月投稿受付分まで掲載料ナシとなっている。こうして現在の悲願はJIPのIF取得となっている。ちなみに、2008年は創立50周年記念事業の一環として、本会の全出版物のオンライン化が達成された年でもある。

和英混載トランザクションの英文論文については、オープンアクセスのOnline Transactionsが創刊され、DCの時と同様にそこに複製が転載される。一方、英文トランザクションの方は2008年に新たに2誌が創刊され計3誌となった。これら英文論文トランザクションに掲載された論文は、和英混載で埋もれる心配がないので、Online Transactionsには転載されていない。

2010年には、情報処理技術者全体に論文という文化を広めることを目指して、デジタルプラクティス(DP)が創刊された。ICT実務の現場で生み出される実践を論文の形にまとめて発表するという新しい試みである。現在の7種の定期刊行物はすべてオンラインであるが、学会誌とこのDPの2誌だけは紙の冊子も発行している。これは、一人でも多くの非会員の方々の目に触れるようにするためである。DPは2012年度末までオープンアクセス、掲載料ナシの予定である。

Impact Factor の取得

過去10年間、論文誌ジャーナル(和英)、DC、JIPに掲載された年間の英文論文数を比較すると減少傾向にあり、一方、和英含めた全掲載論文中の英文論文比率はほぼ10%で横ばいだった。それが2011年度は、全掲載論文数に回復の兆しが見え、英文論文比率も20%を超える健闘ぶりである。これは、幾多の英文論文優遇策が功を奏しているのではないだろうか。いずれにしても、JIPのIF取得とそのランク向上を目指して、会員の皆様にはさらなる学術活動と論文投稿、そしてJIP論文を始めとする本会出版物の積極的な文献引用をお願いし上げる。

冒頭で触れた2012年1月からのJIP季刊化も実はIF取得への布石である。2008年に復刊したJIP論文には巻(Vol)番号は付いていたが号(No)番号は付いておらず、採録が決まった論文から五月雨式に掲載されていた。しかし定期刊行物でなければIF取得は難しいため、このたびの季刊化となった。特集号に採録された論文については、そのプレプリントが先行して論文誌ジャーナル(和)に掲載される。ここで、そもそもIF取得は、世界を牽引するような情報技術を日本から生み出していくためであることを再確認しておきたい。

最後に、本稿で書き切れなかった出来事やデータについては「情報処理学会50年のあゆみ」(情報処理学会編、2010、<http://www.ipsj.or.jp/50anv/50nenshi/data/pdf/top50.pdf>)に詳しいので参照されたい。

(2011年11月20日受付)